

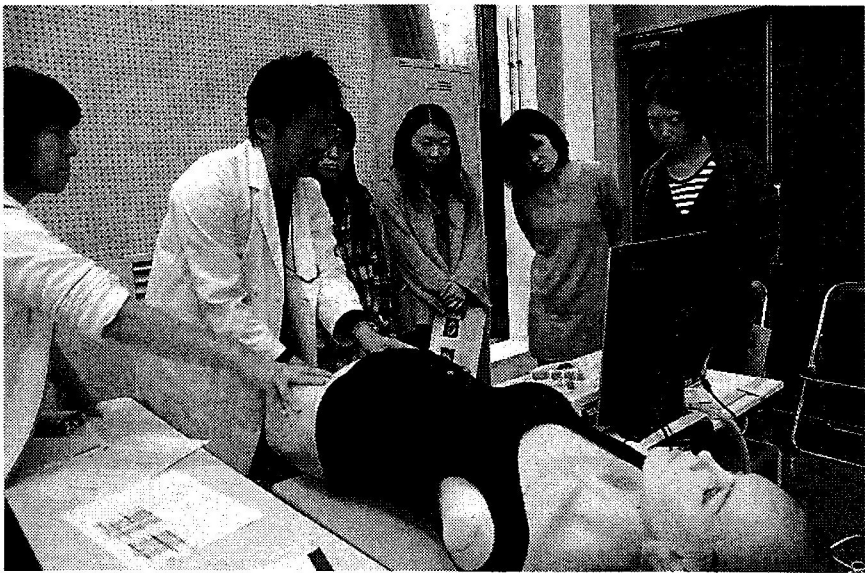
「院内助産」着実に

梨大病院で導入2年 評判広がる

医師の代わりに助産師がお産に立ち会う「院内助産」。医師不足を補うだけでなく、母親に寄り添った「質の高いお産」をめざし2年前に始めた山梨大医学部付属病院では定着しつつある。院外の助産師への技術普及や助産師の権限を広げる取り組みも始めている。

助産師の役割拡大も

山梨大の付属病院に設けられた院内助産施設「よつ葉ルーム」。11月中旬、産後1カ月検診に訪れた。胸に抱く男の子は、ここで出産した。
「助産師さんが手を握っ



産科医の指導のもと、エコー検査のやり方を学ぶ県内の助産師ら＝中央市下河東の山梨大医学部付属病院

てくると、不思議と陣痛がおさまるような気がするんです」。浅利さんは、初めて経験した院内助産をそう振り返る。第1子が安産だったこともあり、2人目は担当医から院内助産を勧められた。「同じ女性に一心同体で付き添ってもらえた」と、友人にも胸を張って院内助産を勧めている。

2009年11月に国立大学の付属病院として初となる院内助産を導入してから、よつ葉ルームで産声を上げた赤ちゃんは計37人。施設やスタッフが限られているため、1カ月に6人までしか対応できないが、口コミで評判が広がり、予約は4カ月先まで埋まっている。

分娩部長の平田修司教授（産婦人科）は「助産師は、母親の満足度より安全性を優先しがちな医師とは違った観点からお産がサポートできる」という。精神的な面まで、きめ細かいケアができる院内助産が、単なる医師不足の代替策ではなく、お産の質の向上につながる」と自負する。

院内助産ができるのは、

現場発！

県の寄付講座による研修セミナーを修了した助産師。山梨大の付属病院では、県全域の助産師を育成するため、院外の助産師にもセミナー参加を奨励している。セミナーを修了して院内助産の資格を取った助産師は、院内外ですでに29人に達している。

さらに院内助産は新たな展開も見せている。山梨大の付属病院は助産師の権限拡大をめざす厚生労働省の研究拠点病院に指定された。産道を損傷した場合の「縫合」と呼ばれる手術を助産師に任せる取り組みを開始。さらに、院内助産のセミナー修了者向けに「縫合」だけの資格認定制度もスタートさせた。すでに7人が認定され、医師の立ち会いのもと、実際に縫合をこなしているという。

助産師による縫合を全国で制度的に認めるには、法整備が欠かせない。平田教授は「助産師の役割を拡大させつつも、お産の安全性を一步も後退させてはいけない」と説明する。来年3月、試行結果をまとめて、厚生省に報告する。

（板垣麻衣子）